巻頭言

総合文化研究所長　山口裕之

『シャルリー・エブド』に対する衝撃的な襲撃事件の後、現在（二〇一五年一月下旬）さまざまな国、さまざまな方面で次々に生じている連鎖的反応には、その衝撃に由来するきわめて感情的な要素がいまだ強烈に支配しているように見える。身近な人々が暴力的に惨殺されたことに対するショックと怒りという個人的な領域にかかわる感情が及ぶ範囲は、もちろんかなり限られているはずだ。Je suis Charlieというプラカードを誇り高く掲げて連帯を表明する人たち、そして基本的にそれを支持する視点から報道する西側ジャーナリズムには、明らかに非難を免れる余地のないテロリズム的行為そのものを批判する側面だけでなく、場合によっては、「イスラム」そのものに対する懐疑的な距離感がしばしばつきまとっている。さらにいえば、「イスラム」によってわれわれのジャーナリズムの「表現の自由」が蹂躙されたことに対する、傷つけられたプライドを回復するための攻撃性さえ見え隠れするように思われる。二〇一四年末からドイツで展開しつつあるペギーダ（「西洋のイスラム化に反対する欧州愛国者」）が、二〇一五年一月七日のシャルリー・エブド襲撃事件のあとにも関連したデモを繰り広げていることに対して、数の上で遥かに凌駕する対抗デモのグループが「人間の尊厳は不可侵である」というドイツ基本法の冒頭の文言を掲げて、多民族多文化の状況を擁護する姿勢を目にすると、ほっと安堵する一面もある。しかし、日本のある新聞では、ドイツでのこの対抗デモの写真を掲げながらも、「欧州で反イスラム拡大」という紛らわしい見出しがその下に置かれる。こういった一連のできごとにおいて動いているのは、本来の意味での信条や論理のせめぎ合いではもはやなく、感情の対立によってますます感情が増幅される反応でしかないようにも見える。さまざまな文化圏のなかで歴史的に形成されてきた諷刺の伝統やその多様な形態をとらえながら諷刺とは何かを考えること、イスラムの真の宗教的感覚や文化的伝統を敬意をもって理解すること、あるいは特定の文化・時代の歴史的コンテクストの中で形成されてきた「表現の自由」が、現在のジャーナリズムのなかでどのように変容を遂げて来ているかを考えること――「総合文化研究所」は、このようなさまざまな価値、思考の枠組み、文化的伝統を横断する場であるはずだろう。新たな政治的連鎖反応を目にしながら、文化と文化のあいだをつなぐ可能性を思う。